

第22回 記者懇談会実施概要

13.6.26

1 日 時 平成13年6月26日(火) 15時～

2 場 所 100周年記念会館 第2会議室

3 内 容 (1) 研究発表(15:00～15:40)

・川上 智子 商学部専任講師

発表テーマ「組織の『緩やかな分化』と製品イノベーション

－国内白物家電産業に関する実証分析－」資料1

・田村 裕 工学部助教授

発表テーマ「バクテリアによる新規多糖合成技術の開発

－バクテリアセルロースの機能化と直接成形化－」資料2

(2) 質疑応答(15:40～16:00)

(3) 学内状況説明・情報交換(16:00～16:30)

ア 2002年度入学試験の実施概要を決定 資料3

イ 学生による授業評価を実施 資料4

ウ 第1回FDフォーラムを開催 資料5

エ 平成14年度から第1部全学部でセメスター制を導入

オ 工学部管理工学科をシステムマネジメント工学科に名称変更

カ 平成13年度私立大学ハイテク・リサーチ・センターに選定

キ インフォメーションシステムによる携帯端末向け情報発信サービスを
開始

ク キャリアデザインルームを設置

ケ 水上競技部の山田沙知子が東アジア大会で金・銀メダル獲得

4 大学側出席者

永田眞三郎学長、藤田武良副学長、大和正史学長補佐、川道麟太郎広報委員長、川上智子
商学部専任講師、田村 裕工学部助教授、中尾正司企画室次長、藤本清高広報課長

5 参考資料

(1) 『関西大学「学の実化」Vol.4 No.1 -データブック2000-』

(関西大学自己点検・評価委員会発行)

(2) 『関西大学「学の実化」Vol.4 No.2 -研究総覧 1999～2000年度-』

(関西大学自己点検・評価委員会発行)

(3) 北岡正子著『魯迅 日本という異文化のなかで』(関西大学出版部発行)

以 上

組織の「緩やかな分化」と製品イノベーション

—国内白物家電産業に関する実証分析—

商学部専任講師 川上智子

日本企業の製品開発組織には、欧米企業とは異なる特徴があると言われている。しかし、先行研究の多くは自動車やパソコンといった技術変化の激しい市場が対象であり、単なる技術力だけでなく、マーケティング力を含めた総合的な能力が必要な産業についての研究はほとんど見られない。

そこで本研究では、成熟産業と言われる白物家電産業において、毎年継続的に新製品を投入し続ける日本のメーカーの製品開発力に注目し、その組織的特徴について考察した。鍵となる概念は「緩やかな分化」である。ここでの「緩やかさ」とは、開発メンバーのキャリア面およびタスク面での冗長性を表している。

製品開発において顧客志向を実現することは重要だが、マーケターが集めた顧客情報を技術者が利用しないこともあり得る。しかし、日本企業のように相手部門のキャリアやタスクを経験したメンバーが多い組織では、新製品開発の参考になる顧客情報が組織内で利用されやすくなるという点が実証的に明らかになる。



かわかみ ともこ
川上 智子
専任講師

1965年福岡県生まれ。生産管理論担当者として2000年4月着任。商学部では久方振りの女性スタッフである。大阪府立茨木高校を経て大阪大学文学部を卒業され、6年間のメーカー研究所勤務で新製品の開発に携われた。その後、向学心やみ難く同大学大学院経済学研究科博士前期課程、続いて神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程へと進学。大学院では消費財メーカーの製品開発について、組織論、製品イノベーション論、マーケティング論の観点からの研究を行われてきた。主として、企業組織における複数部門間の役割分担やコミュニケーションの状況についての理論的考察と実証的解明に関心をもっておられる。責任感が強く、努力家タイプ。共著書として、『マーケティング・インタフェイス』、『マーケティング・ダイアログ』。趣味は、ピアノとカラオケとか。

バクテリアによる新規多糖合成技術の開発 ーバクテリアセルロースの機能化と直接成形化ー

工学部助教授 田村 裕

酢酸菌はグルコースのような単糖類中で培養すると、セルロースを菌体外に分泌する。これをバクテリアセルロース（BC）と呼んでおり、リグニンなどを含まない純粋なセルロースである。しかも、パルプのセルロースよりも結晶度が高く力学的特性に優れているため、繊維として再生すると繊維強度は高いが、生産コストが高く、市場性は低いのが現状である。

私共の研究室では、培地表面に生成する薄膜状のゲルからセルロース繊維やフィルムを直接しかも連続的に生産できる技術を開発して、生産コストの低減化と高機能性BCの調製を目指している。さらに、グルコース以外の糖に順応させた酢酸菌を使って、BC分子鎖中にアミノ糖の様な異種糖残基を導入してBCを機能化する技術の開発にも取り組んでいる。

これらの技術は、環境汚染因子となる化学薬品を使うことなくセルロース繊維やフィルムを単純な装置と単純な精製過程で調製できるため、従来のセルロース繊維よりも性能が優れた生分解性資材を低コストで生産できる上に、環境にも充分配慮した生産システムである。



たむら ひろし
田村 裕
助教授

山口県は秋吉台の生まれ。1978年山口大学工学部工業化学科を卒業。さらに大阪大学工学研究科プロセス工学専攻に進学。83年博士後期課程修了と同時に「ビス（クラウンエーテル）を用いるイオン選択性電極に関する研究」で工学博士を授与された。83年4月関大へ助手として着任。88年専任講師、92年助教授に昇格。

94年度在外研究員として米国フロリダ大学で、非環状ジエンメタセシス重合の研究に従事され、本重合法を共役系高分子の合成に応用展開されている。また、キチン、キトサン、セルロースなどの多糖類の化学修飾、生合成についても精力的に研究されている。

趣味は野球、ゴルフであるが、なかなか機会にめぐまれず腕前の方は一進一退とか。また、バッハ、ベートーヴェンをはじめとした管弦楽曲がとくにお好きだそう。お酒の方は遺伝的に弱く、付き合い程度とのことである。